女教師の賭け

ラストチャンス

春日信彦

～男の亡霊～

　絵美先生へ
美の宇宙　至上の美に歓喜する
心奥深く静かに眠る美　コロナのごとく激しく燃え上がる
美の息吹に陶酔　美の魂に感謝
わが魂「美神」のしもべ

　これは真美雄が絵美先生との衝撃的出会いを詩にしたものだ。子供のころから数えきれないほどの絵を描いてきたが、すべて美を描いたものであった。中学２年のとき遊園地で遊んでいる少女たちを描いた作品が文部科学大臣賞に輝いた。小学校のときにも母親を描いた作品が知事賞に輝きTVニュースでも取り上げられた。そのとき以来、真美雄の心に画家となる夢の風船が大きく膨らんでいった。
　彼は福岡美術大学付属福岡芸工高校の三年生。高校生最後のコンクールの締め切りまで１ヶ月を切っているが、もはや作品を提出することはない。画家となる夢の風船は小さくしぼんでしまった。入学後、数点の絵を描いたがまったく美が描けなくなっていた。２年になってからは絵筆を握ることさえできなくなってしまった。美の線がまったくイメージできなくなってしまったのだ。

すでに、学校にも母親にも進学をせず就職する意思を伝えている。真美雄は母子家庭で私立高校に進学できる家庭環境ではなかった。彼は中学卒業後、定時制高校に通いながら独学で絵を勉強することに決めていたが、文部科学大臣賞が特待生としての条件として認められ付属高校に入学できた。これは意外な幸運であった。また、この幸運は真美雄に画家となる夢が実現できるかのような錯覚を起こさせた。

真美雄の名づけ親は父親輝雄だが、ガンで亡くなった。このことは子供のころに母から聞かされた。だが、高校一年のときに母の妹のおばさんから事実を知らされた。このことは口止めされていたらしいが真美雄の懇願に負けて告白した。事実とは父輝雄は失踪したのだ。また、結婚した当時、父は学生だった。知りえたのはこれだけである。彼はもっと詳しいことを聞き出そうとしたが、それ以上のことはかたくなに拒否された。

失踪の事実を知ってからは父親について勝手な空想をするようになった。特に絵を描き始めるとなぜか脳裏に見たこともない男の顔がぼんやり現れるようになった。そのとき、男の顔をじっと見つめるのだがしばらくすると消えていく。この男は父親の亡霊じゃないかと思っているが、決して不快ではない。できれば何か話しかけてくれないかと思っている。この男は若い。二十歳前後で学生のように見える。

この男が現れると真美雄は時々話しかけることがある。「父さんか？」と声をかけると、男は何も答えず遠ざかっていく。男の顔は何度か点滅すると消える。最後に黄色い長い髪が渦を巻くように広がりながら消えていく。父が失踪した後の消息は定かでない。生きているのか死んでいるのかわからない。この男は死んだ男の亡霊なのかもしれない。父の亡霊なのか？

薄汚い市営住宅に引っ越したのは１５年前である。運が良かったのか日当たりのよい二階の２０４号室が空いていた。母親はこの部屋に入れたことがとても嬉しかったのかニコニコした笑顔を振りまいているのをぼんやりではあるが憶えている。確かにここは格段に家賃が安い。しかし、母親の性格からするともっと小奇麗なコーポを好んでいたのではないかと思われる。

真美雄が幼少のころ、母、裕子はクラブで働いていた。服装は周りから見ると派手であったに違いない。台所ではいつも料理をしながらロックを聴いて楽しそうに踊っていた。裕子は真美雄の前で悲しい顔を一度も見せたことがない。そのためか、父親がいないことに寂しさを感じたことがない

女子高を卒業後、家を飛び出した。そして、東京でキャバ嬢となった。今の仕事は中学に入学したころからだ。世間体を考えて転職したのかもしれない。おそらく、おばさんが勧めたに違いない。この会社に入れたのはおばさんのご主人のコネだ。女子高卒業後長い間風俗の仕事をしていたが、教師であった両親の躾で茶道、華道をやっていたため礼儀正しかった。ピアノとクラッシクバレーは小学校のときまでやらされていた。

裕子は中学に入ると一切の習い事をやめた。また、部活も帰宅部だった。長女と三女は両親の方針に従ったが、裕子は従わなかった。小学校の「将来の夢」と題した卒業作文に女優になりたいと夢を書いた。それを読んだ両親は馬鹿にしたように笑ったのだ。そのとき以来、親との間に溝ができた　真美雄は母親の若いころのことはおばさんに聞いた程度のことしか知らない。裕子は自分のことを真美雄に話したがらない。過去を後ろめたいと思っているのではなく、話の流れで輝雄の話をせざるを得なくなることを恐れている。輝雄との恋愛は裕子にとって宝石よりも輝く宝だ。だが、真美雄に話す勇気はない。あのときの出来事を話すことは愛する輝雄を傷つけるようであり、真美雄までも同じ事になるのではないかと不吉な予感が突如襲ってくるのだ。

～美の衝撃～

　真美雄にとって学校生活は針のむしろとなっている。高一、高二と全国的な賞どころか福岡地区の賞にも該当しなかった。学校からは授業料泥棒のように見られている。ある教師からは学校を辞めろと暴言をはかれた。真美雄は何度退学しようかと思ったことだろう。退学を申し出るたびに思いとどまらせたのが絵美先生なのだ。絵筆を握れなくなった真美雄になぜか手を差し伸べる。

　卒業まで五ヶ月の辛抱と唇をかみ締める。時間が早く経つことだけしかもはや頭にない。市営住宅から通うような貧乏学生は真美雄だけだ。彼には学友はいない。また、真美雄から友達を作る気持ちはまったくない。周りの学生の贅沢な話を聞いているとムカつくだけだ。貧乏であることを隠す気持ちはないが、同情されると惨めになる。だから、夜、小遣いを稼ぐためにピザの宅配のバイトをやっている。

最近の真美雄の行動を裕子は心配している。自暴自棄になり父輝雄の二の舞を踏むのではないかと恐れている。時々不思議な夢の話を裕子に話すようになった。黄色のロングヘアの男がたびたび夢に現れる。男は絵を両手に持って差し出すと思いっきり放り投げる。長い黄色の髪を首に巻き泣いている。何か叫びながら手招きする。絵の具をなめては笑っている。

「母さん、昨日も見たよ、あの男」真美雄はテーブルで独り言を言う。裕子はどのように返事していいかわからず相槌を打つだけだ。真美雄の顔がますます輝雄に似てきた。あのときの輝雄の死に顔が突然裕子の目の前に現れた。裕子の全身から血の気が引いた。真美雄が黄色い髪の男がと言ったとき、気を失い裕子は倒れた。急患センターに運び込まれたときは夜中の一時を過ぎていた。

　昨日、運び込　まれた急患センターから真美雄は学校に向かった。今日、いつも鞄にしまっている退学届けを絵美先生に出す事にした。今では絵美先生に会うためだけに学校に行っている。未練はあるが、絵美先生に別れを告げる決心を固めた。専門課程の美術の授業はアトリエのある別館に行く。美術科の学生は１５人であるが、絵美先生の授業にはデザイン科の学生も参加し２０人の授業となる。

　絵美先生は付属高校と福岡美大の授業のほか他の大学や講習会の講師もやっている。若干２８歳にして准教授だ。世界的に有名でイタリア、フランス、アメリカの大学の客員教授でもある。付属高校には一月に二回の授業が割り当てられている。福岡美大には有名講師が多く在籍している。当然、入学金、授業料、寄付金は他の美大に比べて高額だ。だが、毎年入学志望者が多く競争率は約２０倍だ。

真美雄はいつものキャンバスの前に腰掛け授業の開始を待つ。絵美先生は２０人の作品を細かくチェックし指導する。真美雄は絵筆を持つ最後の作品として彼女の裸体を描いている。当然、イメージの裸体だ。彼女は真美雄の素質を認めている。だが、すでに真美雄から画才の女神は消え去っている。彼女は最後の賭けに出る決意をし、今日の授業に望んだ。

裕子は真美雄のキャンバスの横に立つと納得した笑顔を見せた。しばらく無言で絵を見つめると一枚のメモを手渡した。そこにはマンションの住所と訪問時刻が書かれていた。是非見せたいものがあるので六時以降にマンションに来るようにと書かれてあった。今日はバイトの日であったが退学届けを手渡すには都合がいいとマンションに行くことにした。

昨日入院した急患センターで母親を見舞った後自宅に帰った。着いたのは五時前であった。マンションへはゲンチャリで行くから３０分もあれば十分である。そのマンションは全国的に有名なマンション地区にある。ほとんどが高層マンションで社長、芸能人、プロ野球選手などの金持ちがセカンドハウスとして所有している。最低でも一億円はするといわれている。

一年前に購入した中古のGXはほんの少しチューニングしてある。燃費は悪いが最高７０キロまで出る。少し早かったが五時半にGXでグリーンのマンションに向かった。３０階建てのグリーンのマンションは南側からだと遠くからでも一目でわかる。マンション横に止めると薄汚い愛車が哀れに思えて、マンション地区の中央にある公園に愛車を止めることにした。公園の隅にある自販機で買ったココアを両手で包み指先を温めると、首を反ってマンションの２０階あたりを見上げた。灯りはついていた。

玄関前に立つとARエクセレントⅡSの表示がイタリック体で書かれてあた。２１０８のボタンを押すと色っぽい声が流れた。エントランス左手にあるブラウンのエレベーターが開くと２１のボタンを人差し指で押した。静かにエレベーターは上昇し真美雄を２１階まで運んだ。２１０８のドアの前に立つと一呼吸してハート型のボタンをプッシュした。ロック解除のカチッとする音がするとドアはゆっくりと横に開いたが、目の前には誰もいなかった。

真上から「どうぞ」と声がすると目の前のドアが開いた。スリッパに履き替え中を覗き込むと、広いリビングの右手奥にある白いピアノに絵美の姿があった。中に入ると自動でドアは閉じた。真美雄はライブハウスのような豪華な部屋に呆然とした。左手奥にはカウンター席、正面にはテーブルが五つセッティングされている。絵美は指を止めると左手奥のテーブルに真美雄を案内した。

「よく来てくれたわね。是非見せたいものがあるの。きっと参考になるわ」絵美はカウンターからりんごジュースを運んでくるとストローをさして真美雄の前に置いた。膝の上に置いた両手の指に力を入れると、顔を持ち上げグリーのジャケットの内ポケットに右手を入れた。「それは、見てからにしてちょうだい。隣のアトリエにあるの。こっちに来て」絵美はすばやく立ち上がると真美雄を手招きした。

ピアノ右横のドアに二人は向かった。中に入ると入り口右手に女のマネキンが立っていた。女のマネキンは絵美そっくりである。壁には数点の絵がかけてある。「このマネキン、先生そっくりですね」真美雄は目を丸くした。「似てるでしょう。これは私とまったく同じなのよ。これは最新技術を駆使されて作られているの。１０万ドルかかったの」絵美はマネキンの肩をそっとなでた。

「見せたいものってこれですか？」真美雄は裸体のマネキンを見つめた。「他にもあるわ」壁にかけてある絵に目を向ける。真美雄は無言でじっとマネキンを見つめていた。「マネキンといっても普通のマネキンじゃないのよ。マネキンの肌は人間と同じなの。今日は女の線と肌を教えたくて来てもらったの。早速はじめましょうか」絵美の目が光る。

「両手の指先で顔の輪郭を感じ取ってね。次に目、鼻、口をゆっくりと柔らかく感じ取って。しっかりイメージして！肩、胸に移るわね。肩と胸のラインを何度も感じ取るのよ。特に肩のラインは大切よ。首、肩、背中、一連の女性美のラインをしっかり頭に叩き込んで。乳房の上下左右のラインを指先で確認して」真美雄は震える指先で真剣に感じ取る。

「下腹部と背中のラインを前後左右からしっかり確認して。ヒップのラインはポイントよ。膝、ふくらはぎの曲線もしっかり確認して。少し離れて全身のラインを確認して。前後左右からね。最後に指。指はとても大切ね。女の個性は指にでるの。役に立ったかしら」絵美は真美雄の真剣な眼差しに納得する。

「それじゃ、絵も説明するわ」　入り口左手の壁にかかった絵を指差す。「これは、最近の作品よ。テーマは女の殺意。浮気した夫の目を女が握りつぶしているのね。右下に両目のない男を描いてみたわ。その横の絵は、女の嫉妬。青年が彼女を裏切ったのね。それで彼女が蛇になって彼を奪った女の首を絞めているの。隣は、少年の美。顔は少年というより少女に見えるわね。ニューハーフなの」真美雄は無言で目を輝かせる。「これは、女の二面性を描いたものね。右は愛される至福の女。左は嫉妬に狂う女。二人の女の間にイケメンの裸体を置いてみたわ。その隣は未亡人の欲情。戦争で夫をなくした貴婦人が軍服姿の美青年をじっと見つめているの。戦時中の女性をテーマにしたの。まだ見せたい絵はあるけど今日はこの辺にしましょう」

形見の絵筆

　真美雄は退学届けを手渡すことができなかった。耳慣れたGXの音を聞きながら何も考えず夜道をとばした。駐輪場にGXを放り込むみ一気に階段を駆け上がると、ドアの隙間から明かりが見えた。ノブを引くと台所に母が立っていた。「お帰り、早かったのね」裕子はいつものように笑顔で料理を作っていた。真美雄はバイト帰りの振りをした。
　母親の後姿を見ながらテーブルの椅子に腰掛けた。いつもは部屋にこもってしまうのだが、なぜか母親の姿を見ていたかった。「何か言いたいことでもあるの？」裕子はいつもと違う真美雄を感じ取っていた。「別にないけど、やっぱり最後の絵を描くよ。思い出になるしな」ぶっきらぼうに応えた。「へ～、夢の男にでも勧められたの？」裕子は少し安心した。「夢の男！」母親が夢の男のことを持ち出すとは以外だった。

「いや、思い出を作りたいだけさ。卒業したら大型免許を取ってトラックに乗るよ。車、好きだから」真美雄は母親を喜ばせたかった。「絵描きがトラックね。気をつけてね。お母さんの夢はなんだったと思う？女優なの。かなわなかったけど、若いころ、画学生にモデルになってほしいとお願いされて、絵を描いてもらったことがあるの。何度か、モデルをしているうちに彼を好きになってしまったの。その画学生が輝雄。真美雄のお父さん。本当のことを言うわね。お父さんはこの部屋で自殺したの。絵がかけなくなったのよ。今まで黙っていてごめんね。きっと、真美雄の夢に出てきた男は輝雄よ。まだ、霊が成仏できてないのね」

真美雄も夢の男は父親の亡霊と思っていた。親戚には芸術家はいない。母親も絵が好きだったとは一度も言ったことはなかった。やはり、画才の遺伝子は父親のものだった。違うのは自殺する前に絵描きを止めることだった。「心配ないよ、この絵を最後に二度と描かないから」真美雄は立ち上がると部屋に向かった。「待って真美雄！」裕子は呼び止めた。裕子はエプロンを取るとテーブルに腰掛けた。

「真美雄、まだチャンスはあるのよ。最後の絵が賞を取れば特待生になれるじゃない。絵を愛してないの。輝夫は愛していたの。だから自殺したのよ。自分が許せなかったのね。だけど、誰にでもスランプはあるのよ。もし描き続けていたらきっと認められるときがきたと思うの。母さん、真美雄には輝雄が描けなかった絵を描いてほしいのよ」今まで絵のことに一切触れたことのない母親の言葉に真美雄は唖然とした。「母さん、ありがとう。最後の絵は描きあげるから。お父さんほどの才能はないけどやってみるよ」真美雄は自分に画才がないことを自覚していた。

眠りにつくと絵美先生のマネキンがくっきりと浮かんできた。不思議な絵が次から次とスライドし始めた。突然、あの男が現れた。キャンバスを真美雄に手渡すと黙って消えた。そこには絵美の裸体が描かれてあった。

日曜日は朝一番にGXを洗車する。１０年前のGX。傷だらけで痛々しい。マフラーは錆だらけ。セルモーターは不機嫌。後輪は溝がない。ウェイトローラーは磨り減っている。拭き上げるとちょうど７時であった。真美雄が朝食を済ませキーボードを打っていると、ブルーのチェック柄のトレイを両手にもった母親が入ってきた。そこにはココアが入ったミッキーのマグカップと黄色の絵の具が固まった一本の薄汚い絵筆が載っていた。

女教師の賭け

http://p.booklog.jp/book/40451

著者：サーファーヒカル
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/40451

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/40451

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.